

火星



平成20年6月号

七曜抄
(五)

山尾玉藻

春の波まで回転ドア自動ドア

朧夜の椅子に急いで立ちし跡

松蟬と気づきし誰も無口なる

燕子花家うちの声夕づける

六月の暦のうらのつめたかり

菖蒲田のかつと照る日を家にゐる

松風にきのふの茅の輪ありにけり

老鶯ににぎにぎしくも楳の茸

日の射して沢蟹はたと腰上げぬ

松影の昼の鵜舟の軋みけり

太白星

柳生千枝子

土を掘る幼なに不思議蟻出づる
幼な子に風柔らかく吹いて春
ぶらんこを高漕ぐ空に溶けたくて
涼やかに夜の桜の吹かれをり
萌えいろの独りは花の散りそめの
落花踏む梢は緑いろきざし
水中り口実にしてこもりをり

杉浦典子

雨音の走つてきたり雑木の芽
春キャベツ炒める音に晴れてきし

何の木の何といふ名の小鳥の巢
鳥声や灯して暗き雛の間
咲きはじむ辛夷の下で待ちくれし
桃の日の足湯の駅に降りにけり
卵採りににはとり小屋へ春の泥

浜口高子

雲の端のほぐれ鮎子船戻る
滝川に張り出してゐる春障子
潮騒や駅長室の紙雛
棟上げの柱に春泥跳びにけり
種薯の切口積みてざんざ降り
角落ちし鹿に松明かうかうと
山祇にちよつと退れる蜷の道

火星作品 山尾玉藻選

春の鳥啄みながら糞りながら 八幡 大山文子

屋の星いそぎんちやくに見えるはず

荃立や海へ傾く母の畑

恋猫やメタセコイアははだかなる

霾や東へ下る飛鳥 仏

蛇穴を出で陵の日向まで 大和郡山 城 孝子

金魚田に上下かみしものあり月おぼろ

とぶらひの横顔ばかり花さんしゅゆ

額で泣く文楽人形 霾れる

花の屋シヨッピングカーに駒四つ

かがよへる鮎子船のあたりかな 明石 戸栗末廣

機械室出で落椿落椿

白鳥のひとかたまりに雛の昼

嘯 や 石 灰 袋 真 つ 二 つ
道のこし蝮にもあらむ謀りごと
濡れ縁の真下の疏水桜かな
道に出す黒板メニユー花吹雪
雛かざるセンチターに母置いて来し
あぶく一つ角を離る葦の角
暮るるまでバスの便なし干鰯
ぬかるみの光り始めし野梅かな
梅ひらく骨董市のプロマイド
紅梅の影さしてゐる将棋盤
母の家に宵の客あり種浸し
亀鳴くやをとこの首の金鎖
一對の燈にはじまる花の山
寝ころべばぺんぺん草のさわぎをり
猫の胴過ぎし椿の落ちにけり
雨気孕む山へ入りゆく春の猫
茎立や誰か来ぬかと雲仰ぎ

宝塚 河崎尚子

蘭定かず子

八幡 坂口夫佐子

選のあとに

山尾 玉藻

春の鳥啄みながら糞りながら 大山 文字

「春の鳥」は季語としての捉えどころが漠然としていて、句にするのに少々躊躇してしまふ。頭で理解し過ぎていて、詩的に高め難いとも言えるようだ。ところが掲句、「春の鳥」と真つ向勝負に出て全く力みがなく、簡潔明瞭に、しかもひよいと「春の鳥」の本質を掴んでみせる。「春の鳥」をこころよりことほぐたままのものであろう。へ葦立や海へ傾く母の畑も、バランスの良い季語の斡旋で一句に奥行が生まれた。「葦立」「海へ傾く母の畑」の二物が相乗作用をなし、明るく強靱な母の大きさを懐の深さを物語っている。作者の凝視がいつか精神風景に行きついている写生句。

額で泣く文楽人形 穰れる 城 孝子

綴帳の揚がりきつたる 臃かな 奥田 順子

眼前の事実や事柄が必ずしも詩的真實に結びつくとは限らない。しかし、それらが作者の意識と深く交感した時、そこに詩的真實のひびきが生まれ、一句として成立する。

一句目、文楽の男人形は顔を拳や腕で被い、女人形は袂で被って泣く。そして、白い額を震わせて悲しみの深さを巧みに表現する。なるほど「額で泣く」とは発見である。この発

見が、作者の「穰れる」の重くれた意識により一段と印象付けられる。額の白さが浮きたち、動きに一層の窮りが生じ、読み手はいよいよ納得させられるからである。

二句目、舞台にちよんと木が入り、ゆつくりと綴帳が揚がり切った瞬間である。さて眼前にはどんな場面が出現するのだろうか、読み手も自ずと緊張する。そこへ、作者の脳裏を占める「臃」の茫洋とした意識が働きかけ、この緊張感、臨場感を一層リアリティーあるものにしてゆく。

機械室 出て落椿 落椿 戸栗 末廣

どの程度の大きさは別にして、現在のように全てがコンピュータによつて自動制御される「機械室」であれば、無機質な光りと電子音を放つばかりの空間であろう。その「機械室」から出た作者は、「落椿」がびつしりと地面を覆う景に眼を奪われたのである。「機械室」の冷やかさから「落椿」の明るさへの転換が大変鮮烈で、印象的である。

濡れ縁の真下の疎水桜かな 河崎 尚子

一読、京都の桜の名所、哲学の径と疎水を思つた。径と疎水は大文字山の裾に沿つていて、疎水の山側に並ぶ家々は疎水よりかなり高くなっている。「濡れ縁の真下の疎水桜」の表現は、正しくこの景を言い得ていて、ことばを挟む余地がない。敢えて付言するなら、どこにでも見受けられる卑近な「濡れ縁」が、この句を更に深いものとしている。(以下略)

恒星圈

同人 I

岡 和 絵

飯塚 糸子

水音の社家にありたる花明り
白河の瀬音の昼を揚羽かな
春の泥女ばかりの月詣で
折鶴の千羽に影や花御堂
糠雨の柳生の郷の苗圃かな

大山 文子

桜貝ゆうべの波の湿りあり
踏青や水平線が目の高さ
乙訓の荃立に夜の雷ひとつ
荃立や百済岬に灯の点り
海苔搔の渡る小島に木の鳥居

蘭定 かず子

玻璃越しの初蝶に腰うかせたる
花馬酔木ひとり住まひの庭に咲き
起き抜けの庭ものの芽のまくれなぬ
山なみを見て春泥を跨ぎけり
椀種に土筆ありけり昼御膳

うぐひすや別館へ石踏み渡る
草の芽や歌ひとつ来る隣の子
石ひとつ投げて遅日の川面かな
土筆摘む背中眠たくなりけり
蝌蚪の水遍路姿が覗きをり

四月号補遺

吉田 康子

俎の窪みありけり笹子鳴く
松過ぎや御陵の松のあをあと
露座大佛の耳雪つもりぬたりけり
立春や青菜畑に雪つもり
ひとり居といふ贅沢や春の雪

獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

村上留美子

緒方佳子

ミモザ咲く辻に喪服の集まり来
風光る花屋の角を曲るとき
乗り継ぎの多き近江の朧なる
山の砦てふ塔までの春落葉

遠足が酒樽の尻叩き行く
七つまで数へし雪の座禅草
このあたり長靴の跡座禅草
春雪を解いて淡海の座禅草

垣岡暎子

根本ひろ子

一步出で掌にうく春の雨
順々におん目交して雛納む
如月の光裂きけり鴉一声
隣保みな留守してをりぬ鬼やらひ

桃の日や父の長靴土間に立ち
赤んぼの尻すゑられし豆の花
春あらし九十の母待たせあり
回廊をころがつてゆく春落葉

伊勢きみこ

天谷翔子

朝よりの雨の匂へる仏生会
囀れる丘の上なる明智塚
畦道の人に人就く出開帳
父と子の機嫌よき日や草の餅

囀や極彩色の寺にをり
囀や掘りおこされし王の墓
春の宵シーサーはみな目を開けて
春昼の廢船に咲く黄花かな